◆ 最優秀賞 ◆

メンバー ※敬称略、先頭がリーダー	所属ゼミ	テーマ・企業
上野将希　沖口純也 兼田祥吾　谷萩尚美 小竹孝哉	経営学部・関根純ゼミ	70周年を迎えたかなぎんが、100年企業を目指すための地域密着ブランディング戦略（株式会社神奈川銀行）
飯島詢平　吉田匡希 齋藤諒　五嶋優斗 竹歳七彩	経営学部・関根純ゼミ	一般企業における辛くて、楽しい、何はともあれ参加して良かった１WEEKインターンシップを考えてください（株式会社マイナビ）
岩﨑有沙　今村美玖 稲垣優斗　石崎省悟	経営学部・福原康司ゼミ	サスティナブルな時代における「人が活きる場」とは？オカムラの現在・未来の具体的なアクションを考える（株式会社オカムラ）
鈴木詩太　清水愛恵 奇河璘　浦野雄馬 濱田壮史	経営学部・間嶋崇ゼミ	首都圏第二支店ポカリスエットアイススラリーの新たな需要創出（大塚製薬株式会社）
横山薫　横田将大 小濱里歩　田中杏樹 野口和真	経営学部・目黒良門ゼミ	【京急プレミアポイント】会員数および取扱高の拡大施策について（京浜急行電鉄株式会社）
郡山亜希　河内日向子 志賀楓　伊藤潤介	商学部・石川和男ゼミ	地域資源を発掘・活用したかながわ信用金庫の地域活性化策～信用金庫を身近に感じて頂くための取り組み～（かながわ信用金庫）
市川凌平　北原慶士 松本麻里　渡邊敬太	商学部・石川和男ゼミ	YSグループ・2024年度の広報戦略を考えて下さい。～企業説明動画やイメージキャラクターの作成など～（株式会社YSGホールディングス）
小川泰希　上田さな 髙橋慶人　茂木花海	商学部・成岡浩一ゼミ	はまぎんブランディング向上のための広告・SNS活用戦略（株式会社横浜銀行）

最優秀賞・優秀賞を受賞した皆さん

第19回神奈川産学チャレンジプログラム

参加22大学中最多　最優秀賞に8チーム

神奈川県内の22大学186チーム（887人）と37企業が参加した産学連携の課題解決型コンペ「第19回神奈川産学チャレンジプログラム」（一般社団法人神奈川経済同友会主催）の表彰式が12月12日、横浜市のパシフィコ横浜で行われた。専大からは参加大学中最多の8チームが最優秀賞（別表参照）、16チームが優秀賞に選ばれた。

学生たちは企業から提示されたテーマに対し、半年間にわたって、研究や調査活動に取り組み、解決案をプレゼンした。

経営・目黒良門ゼミの横山薫さん（経営3）のチームは、従来のポイントシステムを活用し、若年層顧客の拡大を目的としたプリペイドカードと、それに連携するアプリを提案した。横山さんは「提案の精度を上げることが難しかった。メンバーと協力してブラッシュアップしていく過程で、ビジネススキルを磨くことができた」と振り返った。

商・成岡浩一ゼミの小川泰希さん（商3）のチームは、SNSを用いた広告戦略という課題に、実際にXやインスタグラムのページを作り、具体的な運用方法を提示した。小川さんは「みんなで意見を出し合ったり、プレゼンを練習したりと楽しく活動できた。プレゼン資料の作り方や発表の仕方など、身につけたスキルを今後に生かしたい」と話した。

冬期日本語・日本事情プログラム　52人が参加

冬期ＪＬＣプログラムの参加者

ウクライナ支援　新たに1人

国際交流協定校からの留学生を中心に、日本語学習を希望する外国人を対象とした「冬期日本語・日本事情プログラム（ＪＬＣ）」が1月10日、開講した。韓国、カナダ、オーストラリア、ポルトガルなどの学生50人と、ウクライナから避難している2人の計52人が参加。コロナ禍以降に実施したＪＬＣプログラムとしては最多となった。2月24日まで国際交流会館に滞在し、レベルに応じた日本語学習や日本文化体験を行う。

本学はウクライナ支援として、すでに日本に避難している方で日本語の学習希望者を対象に、ＪＬＣ（年4回開講）への受け入れを行っており、受講料と国際交流会館の滞在費などを免除している。2022年9月から1人が参加しており、今回はダリア・ポホシャンさん＝写真＝が加わった。

ポホシャンさんはウクライナ・キーウの国立食品技術大学卒で、3年ほど前から日本語を学習していた。22年7月に来日。来日後も独学で日本語学習を続けていたが、もっと深く学びたいとＪＬＣへの参加を希望した。ポホシャンさんは「日本語はウクライナ語と発音が似ていて親しみがある。プログラムへの参加で文法を集中的に学びたい。歌舞伎鑑賞などの文化活動も楽しみ」と語った。

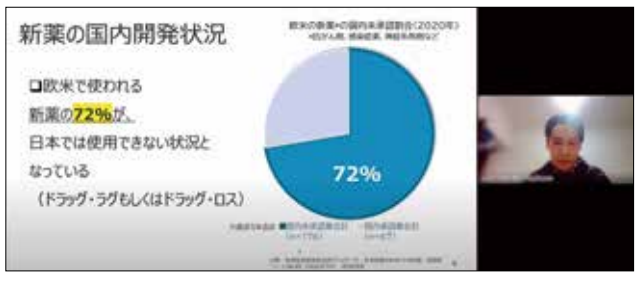
問題解決型チャレンジプログラム　20チームが活動成果発表

課題解決型インターンシップ刷新

キャリアデザインセンターが主催する本学独自の就業体験プログラム「課題解決型インターンシップ」が、今年度から「問題解決型チャレンジプログラム」としてリニューアルした。

企業や団体から提示された課題の解決策を考え、実行することに重点を置いていた旧プログラムに対して、新プログラムは、問題の把握や原因の分析といった上流部分にも関わる点が大きな特長。そこから解決策の立案・実行までを一気通貫で行うことで、問題の根本的解決を目指す。

今年度は、事業企画やマーケティング、イベントの運営など、多種多様な20プロジェクトが実施され、学生たちは学部・学年の垣根を超えた仲間と協力しながら奮闘した。約8カ月に及んだ活動の成果発表会が12月、ウェブで公開された。



成果発表会で製薬業界の課題解決について考えたアステラス製薬チーム

アステラス製薬チームは、欧米で承認済みの新薬が日本では使用できない「ドラッグ・ラグ、ドラッグ・ロス」の問題に着目した。啓発活動として高校生を対象にした出張授業を企画。メンバーの母校で計4回、講義やグループワークを行った。「前向きな感想が多く、自分たちの思いを届けられた」と手応えを語った。

ブックフェアを開催した日本出版販売チーム

日本出版販売チームは書店併設型コンビニエンスストア「ＬＡＷＳＯＮマチの本屋さん」と協働し、向ケ丘遊園駅近くのローソン向ケ丘遊園南店で二つのブックフェアを開催した。多摩区主催のまち歩きイベントとのコラボ、学内の個人・団体が選書した専大生をターゲットにしたフェアを開き、どちらも売り上げ目標を大きく上回った。メンバーは自信に満ちた表情で「大手ビジネスパートナーとの協業を通じて、プレゼン力、交渉力、問題解決力が身についた」と話した。

チーム活動で得た教訓を発表する受講生たち

専修リーダーシップ開発プログラム　チーム活動を通してリーダーシップ学ぶ

「専修リーダーシップ開発プログラム―第11期蒼翼の学舎」の最終報告会が1月18日、生田キャンパスで開かれた。

同プログラムは、キャリアデザインセンターによる課外講座（ＰＢＬプログラム）として創設。その後、経営学部の正課科目（全学公開科目で担当は福原康司教授と間嶋崇教授）とのハイブリッドプログラムとして運営され、今年度で11年目となる。理論・実践・内省のサイクルを回すことで、プログラム生の潜在的なリーダーシップ能力を開花させるようデザインされている。

今年度はプログラム内容を刷新し、実践活動の場として前・後期に各1回、ビジネス・アイデア・コンテストを開催。48人の受講生が10チームに分かれ、アイデアを競った。

最終報告会では、チーム活動のなかで得たリーダーシップに関する学びを「チームの教訓」としてまとめ、発表した。

活動中にモチベーションの低下に直面したというチームは、「雑談のようなインフォーマルな日常会話から価値観や意識を常に共有すること」「価値観の相違を受容する姿勢を持つこと」の2点を改善点として挙げた。

間嶋教授は総評で「リーダーシップ能力の開発は緒に就いたばかり。経験を重ね、磨き続けることを止めないでほしい」と受講生を激励した。